

那須与一伝承館通信〈第4回〉

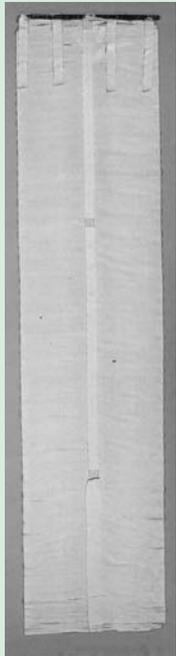
◎源頼朝からもつた白旗

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、あの源頼朝から与えられたとされる白旗を紹介いたします。よく知られているように、白旗は源平合戦において、源氏方であることを示す目印でした。

時は建久四年(一一九三)四月、頼朝の命により那須野が原で巻狩が行われました。巻狩というのは大規模な狩猟のことですが、神事祭礼や軍事演習としての性格もあわせもつ、鎌倉幕府の重要な行事でした。

この那須野が原巻狩において重要な役割を果たしたのが那須光資(光助)です。光資は系図類によると、那須与一の甥もしくは甥の息子とされる人物です。鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』の建久四年三月九日条には、「那須の太郎光助下野の国北条の内一村を拝領す。これ来月那須野に於いて御野遊有るべきの間、その経営の為此を充て行わる」とあり、光資が巻狩の準備料として一村を与えられたことがわかり

たことがわかり



源氏白旗

ます。また同年四月二日条には「那須の太郎光助駄餉を奉る」と記されており、頼朝が那須野が原に滞在した際には、光資がその接待役を務めていたことがわかります。このような巻狩における光資の活躍への褒美として、白旗が与えられたというのです。

先にも触れたように巻狩は幕府の重要行事であり、そこで重い役割を担っているということは、光資が那須氏の惣領として幕府から公認され、御家人としての地位を確立させていたことを示しています。そして、武家の棟梁源頼朝とのゆかりをもつ、那須家の輝かしい歴史を語る品として、この白旗は那須家に守り伝えられてきたのです。古くから那須家のもつ名品として広く知られており、江戸幕府八代將軍の徳川吉宗が江戸城中に取り寄せて実見したこともある品です。

■問い合わせ

那須与一伝承館 TEL (20)0220

彫刻

周遊 ⑨

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

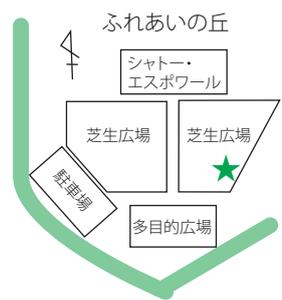


登坂 秀雄 氏

「第一の窓は、体感の窓」であり、子どもたちが丘を駆け下りこの窓をくぐり抜け、素材の石を肌で感じてくれることを期待しています。中段の「第二の窓は現風景を記憶に留める窓」、一番上の「第三の窓は空への指向性を持つ希望の窓」としています。そして、天辺にある丸みを帯びた石は、この作品が原石だったときの中心部分で、それを「鳥たちへのプレゼント」と称しています。作者の願いどおり、現在この作品は子どもたちの遊び場の一つとなっています。

作者は1948年東京都生まれの登坂秀雄氏。現在静岡大学教育学部教授。2007年には、第92回二科展彫刻部で文部科学大臣賞を受賞されています。

設置場所案内図(★印)



この作品は、ふれあいの丘の芝生広場の東端に並べられた彫刻群の中にあります。サイコロのような形をした大中小3つの石が、真ん中を四角形にすっぽりとくり抜かれ、その穴の向きを互い違いにして積み上げられたものです。

作者はその穴を「窓」と呼んでいます。一番下の

風標

とさか ひでお
登坂 秀雄

(東京都)

1997年



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23)8718